神戸百店会だより

★高畠耕琢作品展に

「ミキモト白鷺城」展示

'80ミキモト夏の特別展示会、題して、「高畠耕琢作品展」が、6月24・25日、大阪ロイヤルホテル・桂の間で開かれた。色彩の美しさ形の大胆さ、描線のやさしさなど高畠耕琢の世界が繰り広げられ、夏の装いに重宝する新作が紹介された。

ミキモト白鷺城

会場には、ミキモトが現代の宝飾・工芸技術の粋を結集し、約3年半もの期間をかけて製作した「白鷺城」が特別に展示された。実物の90分の1の大きさでダイヤモンド447個、サファイヤ36個、エメラルド34個、ルビー2個、そして台座には19000個の真珠が飾られた見事な美術工芸品。訪れた人々は「白鷺城」の精巧さ、豪華さ、端麗さに目を奪われていた。

★メープル不二屋ショールームをオープン

7月1日よりメープル不二屋神戸店二階に、本格的ショールームがオープンした。リビングルームやダイニングルームやベッドルームなどセット家具から小物アクセサリーにいたるまで総合的なインテリアプランを一部屋ごとに配置したもの。あなたのお部屋づくりのイメージに合わせて、トータル・インテリア・プランを練って下さい。

豪華なセットが揃ったショールーム

★オリエンタルホテル1階ロビー改装オープン！

オリエンタルホテルの1階ロビーが改装工事中だったが、7月にデリカショップ、アッパーラウンジ、コーヒーハウス「エリートセブン」がそれぞれオープンした。正面玄関左側にできたデリカショップには、ホテルのホームメイド製品、洋惣菜、スパイス類、西洋料理の本等が揃っている。アッパーラウンジはゆったりしたスペースでゴージャスなムードが楽しめる。ロビーと興銀側から入れるコーヒーハウスではオープニングフェアが催されている。

・デリカショップ11AM～7PM
・アッパーラウンジ10AM～7PM　お見合い、ご商談に最適
・コーヒーハウス7AM～12PM
・さよならバー「マーメイド」8／1～8／31　12AM～11PM　洋酒メーカーのノベルティプレゼント実施中
・グリルB1　夏休みファミリーフェア　7／20～8／31　11：30AM～8PM　サーロインロースト・ビーフ、スープ、季節サラダ添え、デザート、コーヒー、パン盛り合せ又はライス（スープ、デザートは日替り）¥1500（サ込）　お子様ランチ　¥800（サ込）
・スカイレストラン　夏休みファミリーディナー　7／25～8／31　12AM～2：30PM　5PM～10PM　大人3800円　小人2000円（税サ別）

●ショップトピックス

★洋菓子のヒロタからさわやかなオレンジリキュールが6月21日より発売されました。オレンジピールのはいった新しい味です。よく冷やしてお召しあがり下さい。1パック（4コ入）200円

★つるや衣裳店では8月3日、貿易センタービル23階ホールにて「ご婚礼衣裳展示会」を開催。

★中川衣裳店では「秋期花嫁衣裳展示会」を開催します。8月3日は舞子ビラにて、8月31日はニューポートホテルにて。ぜひお出かけ下さい。

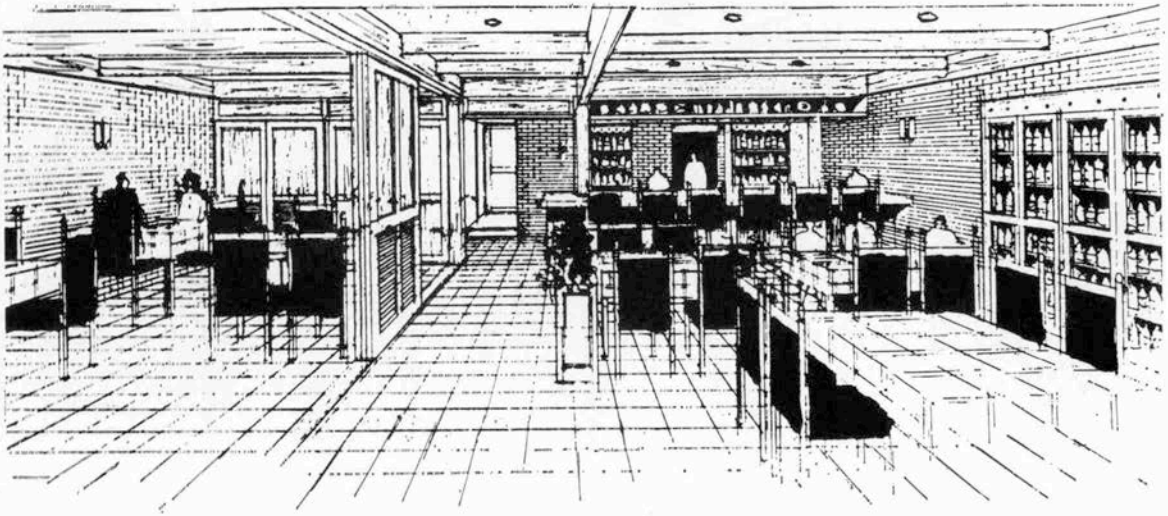
★呉服のみよしや「秋物豪華展」を9月12、13日農業会館11Fにて開催。どうぞご高覧下さい。

★北野クラブで神戸の街を見降ろしながらの結婚披露宴は8000円（50人～100人）より。フランス料理のメニューを選べるのが特徴。また1年目の記念日には、お2人をお食事にご招待いたします。お問い合わせ／北野クラブまで　☎222－5123

★夏の夜空はコメットの乱舞。この夏人気は風月堂のお洒落な金平糖たち。名付けてクリスタル・ポンポン。白、橙、黄、ピンク、緑、茶色の6色で色ごとに違った味。ワイングラスに入って500円。小さな袋入りで50円。

★結婚披露宴の引出菓子に趣向がかわった菊水総本店の新製品〝秀菊の宴〟はいかがでしょう。平安朝時代の貴族の典雅な遊びを和菓子に託して、昔の良さを知ってもらおうという同社の意向。包装も友禅の下絵描きが和紙にデザインされ雅水、寿賀、秋扇の三種類が入って、贈答にぴったりです。

エキゾチックなKOBEのハイセンスなレストランです。



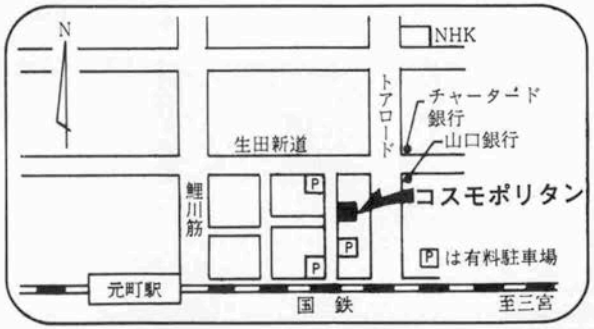
ゴージャスな中にもシックで落ち着いた雰囲気。スイスフォンデユを皆様のお口に合うように、和風にアレンジし、上質の但馬牛のステーキなど品数も揃えております。

WINE & RESTAURANT

COSMOPOLITAN

神戸市生田区下山手通３丁目３６
コスモビル地階
ＴＥＬ.(078)３９２－４８１８

〈営業時間〉
平日　昼・AM11：30～PM2：00　夜・PM5：00～
日曜　夜PM5：00～



★にしむら三宮店が拡張

国鉄三宮駅山側の喫茶のにしむらが8月上旬2階を拡張してオープン。「来年のポートピア'81の玄関口三宮がひと目で見える絶好の部屋でゆっくりお寛ぎを」と川瀬喜代子オーナー。

★百種以上のスパゲティ!!

名物〝たらこスパゲティ〟を始め、和洋百数十種のスパゲティを食べさせるのがRyu-Ryu岡本店。

阪神間のスパゲティ・グルメの間ではつとに名高い西宮北口にあるRyu-Ryuの姉妹店として今年一月にオープンした。以来、評判は評判を呼び、学生街という地の利もあって、お昼どきには大盛況。西巻マスター以下のスタッフはうれしい悲鳴をあげている。

メニューは、スパゲティミートソースが六百円。アサリとマッシュルームがたっぷり入ったボンゴレが六百五十円など。

岡本店／452－9840　西宮店／0798－64－5611

Ryu Ryu の西巻マスター（中央）とスタッフ

★絶品！〝芋豆腐〟

阪急六甲と国鉄六甲道のなかほど、コーポ六甲向かいの金沢ビル二階にあるのが、知る人ぞ知る「八巻」だ。

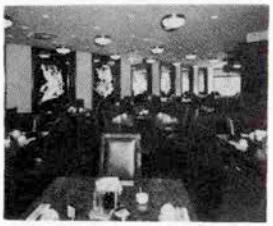
和気あいあいの雰囲気で…

「サラリーマン時代からの趣味だった磯釣りと食べ歩きが高じて―」と語るご主人の熊谷さんは、他の店にはない料理や、あっても高くてちょっと手が出ない料理を思いっきり安く食べてもらいたい、という。

お奨めは五百円也の各種定食と、いか天（五百円）、奄美鶏飯（六百円）、芋豆腐（八百円）などの一品料理。中でも京風薄味に仕上げた自然薯入りの湯豆腐、「芋豆腐」は絶品。

一一時半―午後二時、午後六時―午前〇時／☎八五四―〇四五二

★家庭で本場の広東料理を


料理教室が開かれる御影本店

本場の広東料理に親しんでもらおうと「ほんとうの広東料理教室」が、九月から別館牡丹園御影本店で開かれる。内容は、本場一流店出身のコック、麦さんが調理するのを見学、説明をうけたあと、その料理を中心に会食するというものでメニューも簡単で見栄えのする品を予定している。

第1回は9月19日（金）午後2時―4時。受講料二千円程度。定員は16名先着順。メニュー／芝海老の甘酢かけ、豆腐とカニの煮つけミンチ肉のレタス包み。

●神戸うまいもんとドリンキング

アリ／フランセ

東灘区岡本1、有本ビル2F

☎451－5522

「料理長はオーケストラの指揮者と同じ。各奏者の個性を生かしながら壮麗なシンフォニーをうみだす指揮者のように、料理人それぞれの個性を生かした味覚のハーモニーを創り出すのが料理長の役割」と荘司シェフ。

昨年十月に開店以来、ダイエットフランス料理や野禽料理を含む〝新しいフランス料理〟の店として着実にファンを増やしてきた。

常連ファンでにぎわう店内

推薦メニューは「小さな四季」（三千五百円）。ちょっと気取ったディナーにいかが？

水曜定休／正午―午後九時（二時―五時はティータイム）

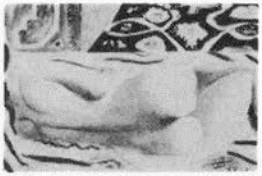
ポケットジャーナル

★県立近代美術館
秋以降の特別展決まる

兵庫県立近代美術館（楢崎四郎館長）は十月に開設10周年を迎えるが、秋以降の記念展の日程が決定した

□**小出楢重展**（9月2日―28日）佐伯祐三、中村忠二につづく「ある画家の生涯と芸術展」第三弾。未公開作品を含む約160点の作品と小出の生涯を浮き彫りにする資料も合わせて展覧される。

□**名品展**（10月10日―11月9日予定）彫刻、版画、郷土作家の館蔵品を中心に帰託作品を加えて展覧。同館収蔵品のダイジェスト展ともいえる。



小出楢重「裸婦」（30）

□**ボナール展**（11月16日―12月21日予定）フランスの画家ボナール展としては戦後最も充実した内容となる。

□**アール・ヌーボーとジャポニズム**（'80 1月7日―2月8日予定）アール・ヌーボーの芸術のなかで日本美術に触発された作品を巾広く展覧。作品はハンブルグ装飾工芸美術館のコレクションからセレクトされる。

□県立近代美術館／☎801―1591

★コウベファッションフェア'81 華やかに開催

トータルファッションの育成、地場産業の発展、市民の生活文化向上を目的に恒例のコウベファッションフェアが、9月6日より10月5日まで催される。

今年も華やかにコウベファッション

幕明けは9月6日のコウベファッションショー'80。ビューティフルこうべをテーマに、第一部はコウベファッションデザインコンテスト発表〈最終審査は8月25日、神戸商工会議所〉、第二部はKFAショー、日本真珠輸出組合・KFCジョイントショーが神戸国際会館大ホールで行われる。〈演出・構成は木村茂、入場料は2500円〉

期間中の主な催しは、コウベファッション市民大学（10月上旬より）、デザインコンテスト入賞作品展など。

★みどりがいっぱい
グリーンピア三木

兵庫県が進めている「みどりの回廊」計画の一環としてこのほど大規模年金保養基地「グリーンピア三木」がオープンした。

上・ロッジ、下・トリムコース

これは、三木市細川の総面積347万平方米の広大な山林地帯に開設されたもので、宿泊施設（ホテル、ペンション、ロッジ、ステージ）、スポーツ施設（体育館、テニスコート、屋内プール、屋外プール、トリムコース、屋外ステージなど）、会議・集会室、セミナーハウスが完備されており、また、本館（レクリエーションセンター）には集会場、結婚式場／宴会場、大浴場／娯楽などの施設があり、広場、庭園など屋外施設も変化に富んでいて、多目的に活用できる。

厚生年金、船員保険、国民年金の加入・受給者なら誰でも利用できる。

〈問い合わせ・申込み〉グリーンピア三木事務所／☎0794―83―5211入園料大人400円、小学生以下200円、駐車場完備。

誕生日ありがとう運動

蚊の涙さん「天声人語」

本運動のことが、七月七日付の朝日新聞の「天声人語」で取りあげられました。その概略は、

「蚊の涙」氏が、十五年の間、途切れることなく、献金を続けている。最近は、二か月ごとに手紙と千円の為替を送ってくる。あて先は神戸市の「誕生日ありがとう運動本部」。障害児教育の団体である。▼蚊の涙氏は大阪にいる。分かっているのは、それだけである。手紙の終わりには、決まってこう書かれている。「蚊の涙ほどの額ですがお送りします。お手数ながらお願い申し上げます」。運動を進めてきた先生方は、蚊の涙氏によってどれほど力づけられたかしれない。蚊の涙氏の寄せる金は、蚊の涙のように小さな点でしかなかったが、内蔵するエネルギーは、核のように強力だった。▼強力な点を連続させて、面に広げていく。地味で根気のいるこうした手法は、とかく忘れられがちである。巨大な計画を組み、巨大な投資をし、それが大きいほど、住民の福祉は向上するといった幻想がばらまかれる。住民が求め、そして感動するのは、そんな大きなことではない。心のこもった小さな点なのだ。（中略）

点を面にという発想を、行政全体が忘れている。広大、華麗な構想より、蚊の涙ほどでいい、心のこもった実行がほしいのだ。

誕生日ありがとう運動
651 神戸市葺合区御幸通八―一―六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一―八一六一内線三一六

★朝日カルチャーセンター
神戸でも開講

現在、東京、大阪など八ケ所の全国主要都市に開設されている〝生涯学習のひろば〟――「朝日カルチャーセンター」が9月から神戸にも開設される。

三宮センター街のセンタープラザ西館四階に、教養、工芸、生け花、茶道、健康舞踊、語学、絵画、書道など大小11の教室を設け、122講座149クラスで開講する。各分野とも最高水準のカリキュラムを盛り込み、本誌でお馴染みの中西勝画伯、石阪春生画伯、市野木江充子先生、小西保文画伯なども講師として参加される。

申し込みは7月20日から受け付けているが、早くも申し込みが殺到している。

＜問い合わせ先＞神戸市生田区三宮町二―一―五、センタープラザ西館内「朝日カルチャーセンター・神戸」☎078―321―5222

★ユニオン教会で原　令子
ソプラノリサイタル

レスラーさん　原令子さん

ま夏の夕べに荘厳な宗教音楽をと原令子さんが、8月4日、神戸のユニオン教会でリサイタルを開く。共演はアルムート・レスラーさん（オルガン）、尾関えりかさん（ヴァイオリン）。原さんは神戸女学院卒業後、西独に留学。現在、教会歌手として活躍中。入場料1500円

★酸いも甘いもかみわけて
望月美佐の誕生会

女流書家の望月美佐さんが、6月26日に生田神社会館で、恒例のバースディパーティを盛大に開いた。酸いも甘いもかみわけた円熟の期に入る美佐さんの華麗な生きざまに〝甘からパーティ〟の趣向がこらされた。

左はお祝いに駆けつけた土井たか子議員と美佐さん

セレモニイは、吉川英治が伊勢神宮で詠んだ歌を新井満が弾き語り、神官の衣裳で美佐さんが〝動の書〟を福田宮司の春歌二首はホンネの書として、女美佐の本領発揮。美佐教の社旗贈呈は小池管長が。今年は〝美しいペン字〟と〝じかきうた〟の二冊を仕上げ、情操教育に余念のない美佐さんだ。沖縄旅行からのおみやげに、仲村米子さんの本格的な琉球舞踊の後、美佐さんも花笠と琉球衣裳で舞ったのに皆〝お化け〟とびっくり。七変化の魅力充分の美佐の会だった。

★竹村まこと人形リサイタル、一人芸の限界に挑戦

腹話術の竹村まことさんが芸能生活25周年を機に8月1日から3日間、ラジオ関西ホールで〝人形リサイタル〟を行なう。27体の動く人形が繰り広げるファンタジックな世界を、一人芸で熱演。竹村さんが人形にこめる限りない情熱が心を打つ。大人のための動く人形の絵本。司会は八尾千秋さん、構成・演出は今崎陽吉・村上和子さん、加藤きよ子さんの振付。

竹村まことさん

演し物は、〝ゆかいな〟ペット〟〝お化け長屋〟〝竹村まことの腹話術の世界〟。＜一五〇〇円＞＜問い合わせ＞あすなろ腹話術研究会☎078（577）1184

★楽しく踊ろう！〝みんな元気のテーマ〟で

前月号で紹介した「みんな元気ジム」、親と子の暖かい触れ合いを求めて頑張っているが、この程、ポリドール㈱より楽しいLP盤のレコードを出した。

題して、「みんなげんき―体操とうたあそびオリジナル集 Vol1」（幼児教育研究会）、演奏はみんなげんきファミリーバンド、曲のほとんどが主宰者の米田和正さんや山田美紀子さん

さあ伸びをして今日も元気に！

美術ガイド

★県立近代美術館
'80県展　7/19～8/17
金山平三芝居絵・水彩展　8/5～9/28

★さんちか広場
消費生活展　7/31～8/5
HEIWAペーパーフェア'80　8/7～8/12
兵庫県文化資料展と古書即売会　8/14～8/19

★ギャラリーさんちか
アトリエ青銅社展　7/31～8/5
難波洋洞源氏物語全巻書写記念展　8/7～8/12
読売新聞大阪発刊一万号記念展　8/14～8/19
水中写真展　8/21～8/26

★ギャルリー神戸時代
田中美穂小品展　8/1～8/31

★画廊錦
ムーミン展　8/7～8/12

★白いアトリエ
赤川孝一油彩展　7/27～8/2
神田　写真展　8/10～8/16
岡本のり子デコパージュ展　8/17～8/23
平井三鈴油彩個展　8/24～8/30

★そごう神戸店美術画廊
洋画秀作50選展　7/31～8/6
全国創作こけし工芸作家展　8/8～8/13
現代中国作家絵画展　8/15～8/20
久世久宝茶陶展　8/23～8/27

★大丸神戸店美術画廊
鈴木政輝洋画展　7/31～8/5
西洋美術装飾展　8/6～8/11
現代作家彫刻小品展　8/14～8/19
有名大家工芸画展　8/21～8/26
ヨーロッパリトグラフ展　8/28～9/2

★三越神戸店美術画廊
エトワール現代油絵小品展　8/1～8/24
日仏版画展　8/26～8/31

★ギャラリード・ラ・ペ
元永定正版画展　8/9～8/17

らの作詞・曲による手づくりレコード。

暑い夏、〝みんなげんきのテーマ〟にのって親子で踊ってみませんか。

☎0798－26－0020

★日本酒党、全員集合

唄声バックにひや酒痛飲

夏はやっぱりビールという左党の面々に、冷たい日本酒のオンザロックのうまさを再認識させようと、6月30日から3日間、農業会館大ホールで、「ヒヤ・ホール」がオープン。

歌う小坂明子

10人掛けのテーブルに、ドンと置かれた灘の代表酒（白雪、日本盛、白鷹、白鹿、櫻正宗、金露、白鶴、世界長、福徳長、澤之鶴）を思い思いにコップに注ぎ飲み比べるという趣向。

若い世代にもひや酒の魅力を知ってもらいたいと、歌手の小坂明子を招き、楽しいステージとサイン入りレコードのプレゼント。

仕事帰りのサラリーマンに混って、一人コップ酒を傾ける女性の姿も目につきいかにも神戸らしい風景。主催は微醺の会。

☎351－6996

★現代社会の病弊をさぐる

力作「密室の母と子」

朝日新聞の家庭欄で昨年8月に7回にわたってレポートされた「密室の母子」は母子相姦という衝撃のテーマを扱って大きな反響をよんだ。本書は、その内容に新たな資料を加えて再構成したものである。

川名紀美さん

「ダイヤル避妊相談室」によせられた相談事例は、ぞっとする程の迫力をもっている。この現象は特異なものとして切捨てられない。背景には多くの家庭に蔓延している母と子の癒着がある。親ばなれしない子と子ばなれできない親、これは社会全体の責任ではないかと本書は警鐘を鳴らしている。筆者の川名紀美さんは朝日新聞の記者で、神戸支局でも活躍された方。

＜潮出版社刊・980円＞

花時計

熟年の時代

作家の邦光史郎氏はセカンドライフの会代表でもある。

邦光氏の主唱するところは、昔は人生五十年といい、六十で還暦、七十で古稀といった。現代の七十才は古来稀れどころか現役の人が多い。

つまり、従来の年令区分である、少年－青年－壮年－老年という言葉があてはまらないということなのである。まさにその通りだと思う。

言葉は時代とともにその内容なり、イメージは変化する。現在、壮年を三十代、四十代とすると、五十代、六十代は老年なのかと言うのである。確かにこれは時代にそぐわない。邦光氏はそこで、新しい年令区分として少年－青年－壮年－熟年－老年として、45才から65才を熟年と名づけ円熟せる世代だという。

一般的に平均年令が短期間に延びたことは誰しも承知しているが、言葉ひとつにもそんな矛盾が顕われている。

この熟年時代の対応は高齢化社会の人生において大変重要な焦点であることは事実である。

成人式の向こうを張って熟年式を提案する邦光氏である。より積極的により美しく熟年時代を生きようとする「熟年宣言」を深く考えたい。＜Y＞

●KOBE POST

★カモカのおっちゃんこと**川野純夫**さんと作家**田辺聖子**さん率いる〝カモカ連〟が、8月12日～13日と、4回目の徳島・阿波踊りへくりだす。徳島出身のマンガ家・**高橋孟**さんや女優の**稲垣美穂子**さん、初参加のフォークグループ〝紙風船〟、東京の出版社の編集者達、神戸は**藤本ハルミ**、**花柳芳恵一子**、**川瀬喜代子**、**阪東慧**、**加藤きよ子**さんら83名が参加する。

★神戸大学教育学部の**鈴木正幸**教授は6月29日生田神社会館で、最近発刊の「現代教育の原理と展開」川島書店「母親のための教育学」神戸新聞事業社のための出版記念会を開いた。

★シャンソンの**堀都子**さんが7月17日（木）東京日比谷エスパースジローにおいて〝クインフォアカード〟に、**石井好子**、**戸川昌子**、**水森亜士**さんらと共演されました

★金丸建築設計室の**金丸正博**さんが事務所を移転されました。〒650神戸市生田区中山手通4ノ27ノ1山の手シャルマン5F（鯉川筋・群愛飯店西向）☎078（392）0501

★ミキモト真珠大阪支店長に、**山岸早苗**さんが着任されました。

★本誌の人気読物のひとつ〝動物園飼育日記〟の著者**亀井一成**氏が〝ゾウさんの遺言〟をこの6月発刊。昨年朝日テレビで放映された〝ゾウさんの遺言――マヤ子の一生〟が大きな反響を呼んだ。亀井氏と動物園で初めて接したゾウのマヤ子が結核で亡くなるまでの暖かい交流を語ったこの物語は、周囲からの要望も強く、ポプラ社のノンフィクションシリーズとして登場夏休みを控えて小学校高学年の子供さんにはぜひ勧めたい一冊だ。＜ポプラ社刊・880円＞

ビジネス街のオアシス

喫茶

モンブラン

市役所前KEビル1F ☎231-3605
8:00AM～8:00PM日曜祭日休

食通派に好評、手打ちの味

そば処・手打ちうどんうどんすき・一品料理

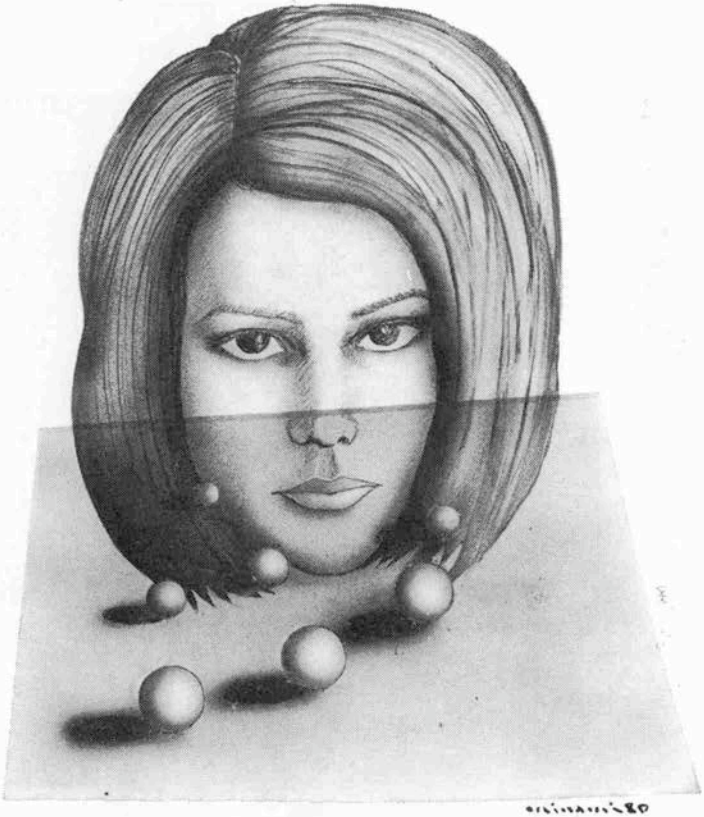
木曽路

神戸市役所前KEビルB1 ☎231-1255
11:00AM～8:30PM 日曜祭日休

暑中お見舞い申しあげます

トンカツ
ムサシ

本　店
三宮・センター街　TEL321-0634
11:00AM－7:30PM　毎水曜日休み
さんプラザ店
三宮・さんプラザB1　TEL391-2427
11:10AM－8:00PM　毎月曜日休み



暗葉樹

刀禰喜美子（とねきみこ）
絵／南　和好

連載小説〈第Ⅱ回〉

木谷は殴る、蹴る、ピンタをくらわす、喚くという軍隊調で、伸子を痛めつけた。顔は腫れあがり頬はひりついてきた。目が細くしかあけられない。伸子はその細い目を思いっきり見開いて、木谷を睨みつけた。底光りがしているだろう視線を無言で浴びせかけた。

「貴様一人の才覚ではない筈だ。工場内に協力者がいるのだろう。共犯者の名をいえ」

木谷は工場側に責任を押しつけたがっていた。木谷の視察日に事件がおきたということを避けたいのだろう。

木谷の推測通り、伸子は柴野と共謀していた。だが、自分の不手際で発覚した上は、単独行為として裁かれたかった。

この製薬工場での伸子の配属部署は実験室であった。製品の純度の検査と欠点の改良とが実験室での仕事であった。伸子達は融点を測ったり、試験管やフラスコを洗ったり、命じられた化学的な諸問題を書庫に行ってノートに転記してくる、などした。実験室での質問は一切禁じられていて、与えられた仕事に黙々と従事するだけであった。口が固くて秘密の守れる者というのが、工場側から学徒に出された実験室配属者の条件で、それに選ばれた自負が伸子にはあった。

今日は伸子と柴野と二人だけが実験室にいた。主任も副主任も欠勤で、これといった仕事がなかった。他の職員と学徒は忙しい他の工場に応援に行った。「二人だけとはお羨ましい」という捨て台詞にあほられ、急に二人だけを意識しはじめた。

伸子達の周囲には若くて健康な男性は戦場に征って見あたらなかったから、柴野は目立っていた。柴野は病身のため学徒出陣は免れて、薬専卒業後実験助手をしていた。目許がよいとか笑顔が可愛いいとかいって、女子動員学徒に人気があった。大袈裟に騒ぐことで、何の楽しみもない労働の疲労を紛わしていた。現場は大きなドラム罐やサクサン瓶との格闘で、薬臭にも悩まされていた。伸子達五、六人は力仕事でないことや汚れないことで羨望されていた。その上柴野がいた。

副主任は女性薬剤師で学徒全員の世話係だった。異性問題を取締るお目付役と同室では、柴野と親しくなる機会はなかった。柴野はすべてを心得ているように、朝夕の挨拶や用件以外寡黙な態度をとっていた。

その日の柴野は、他の目を意識しないですむ解放感からか、饒舌であった。日頃の無口が信じられないように伸子に喋りかけてきた。日頃鬱積しているものを全部吐き出すかのように能弁であった。伸子はそんな柴野を知らなかったから珍しい人を見る目付で聞きいった。

柴野はまるで主任と副主任に挑戦するように彼等の噂をした。今日二人揃っての欠勤はきっと示し合わせてどこかで楽しんでいるのだ、主任は妻子がありながら副主任と深い仲であり、彼等は学徒と問題をおこしてはならないと注意をしながら、自分達は適当によろしくやっている、と柴野はいった。その上、残業といってそれからが彼等の本業になっている、サッカリン、ズルチン、石鹸、化粧品などの製造に余念のないこと、それ等を横流しして何かと便宜を計っていることなどを柴野はまくしたてた。伸子は急に打明けられた事実に頭が混乱した。

「今日は鍵を預っているんだ。鍵を預かることなどめったにない。証拠を摑みたい。幸い二人っきりだ。協力してくれますか」

伸子は頷いた。柴野は更衣箱の一番端の南京錠のおりている所に近寄った。鍵を開けると予想通り、サッカリンとズルチンのはいったカステラ大のボール箱がぎっしりと詰まっていた。

その物量に伸子は愕き、二人で一箱ずつ抜き盗った。一箱位減っても何の変化もなかった。ごく少量で効果のある甘味料だけに貴重だった。伸子は学徒達の共通のヒーローである柴野と二人きりの秘密を持ったことに、震えるような興奮を味わっていた。

宝物を手にした盗賊のように、机の上にボール箱を置

き、蓋を開けてシロホンをならすように錠剤壜を弾いていった。持出す相談をした。検門は厳重で、主任級以下は門衛の点検があり柴野は被点検者であった。伸子は集団で出門するので検閲はない。伸子が持出す役を引き受けた。主任の留守の今日に決めた。七時に駅の裏側の公園で逢うことにした。

品物がもう自分の物になったような充足感で、二人は目をみつめて笑った。二人だけの秘密ね、と明日から柴野に特別なまなざしが送れると思っただけで、伸子はぞくぞくした。主任達がたとえ勘付いたとしても詰問できない立場を嘲笑し、伸子はざまをみろと内心毒づいた。口では国のため生産をあげよと男並の労働を強いながら、自分達は労働力の余りいらない日用品をひそかに製造している。学徒の風紀を取り締る陰で不倫の関係を持っている主任と副主任。柴野と伸子の行為は反撥心が大半を占めていた。

その時、罪の意識は伸子には全くなかったのに、木谷にこうしてあばかれてみると、罪を犯したに違いない反省心がもたげてきた。

木谷は伸子に喚いた。

「この工場が他の工場に比べて待遇がよいのはだな。我々教官がわが女専の学徒は優秀だと保証しているからだ工場側も安心して学徒に重要な部署を任せてくれているのだ。その好意を裏切って、製品を持出すとは破廉恥きわまりない行為だ。非国民の最たるものだ。貴様一人でしたとはどうしても思えん。共犯は誰だ。いえ」

木谷は革の長靴を脱いでそれを手にし、伸子を殴った。

「強情者奴が。いわなくても調べればすぐ解るのだぞ。そうすると事が大きくなるから聞いているのだ。わが校の名誉をきずつけたいのか。貴様がひとこと名をあかせば、私が善処してやる。どうだ」

約束の時間を過ぎても伸子が来ないので柴野はどうしたであろうかと、そのことの方が伸子は気がかりであった。あのあと空襲になり、二人だけの時間にピリョウドが打たれた。柴野は職員用の、伸子は学徒用の防空壕に別々に待避し、そのままになった。明るいうちの空襲は偵察だけで大したことはないだろう、の柴野の言葉に反して、空襲は長びき相当ひどいようだった。別れ際にじゃ七時に公園で、ともう一度念を押した柴野は、

「持出しを頼もうと思って計画的にしたのではないよ。偶然そうなったのだ。二人っきりになれたのに甘えていたのだ。嬉しかったんだな」

といって、伸子の肩に両手をしっかりと乗せ、目をみつめたまま手をゆっくり滑り下ろすと、伸子の両手を握った。その暖かみは今も残っているようだった。柴野が両手を肩からすべらした時、チカッと指先が乳首に触れた。その戦慄がまだ乳首の先で躍っているようだった。

木谷の言葉通り、実験室は今日二人切りだったことは調べればすぐ解ることだった。だが、調べて柴野の名が泛びあがってくるのと、伸子自らが口を割って柴野の名が出るのとでは雲泥の差がある、と伸子はまだその時はそう思って、頑なに口を閉ざしていた。

「しぶとい奴だ」

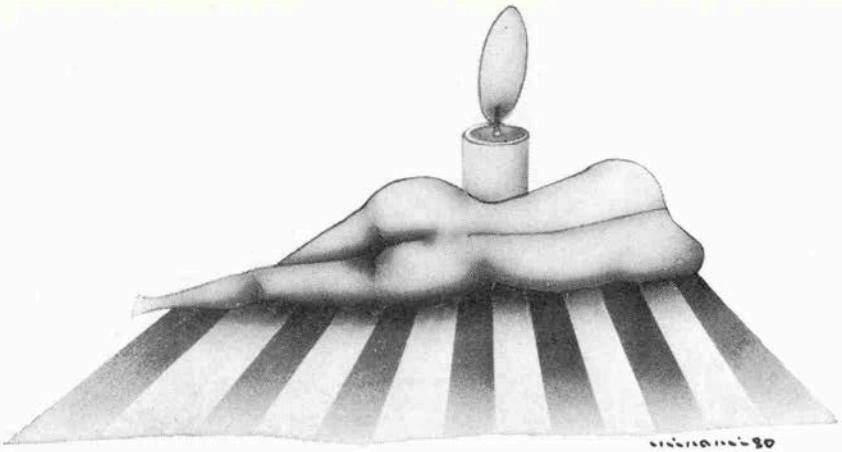
木谷の足がまたしても尻を蹴り上げる。伸子は痛みをこらえる。反抗心は昂まっていく。空気の振動で焔はゆらゆらと大きく揺れ動いた。鼻下に髭を貯えた口が動くたびに、木谷のえらの張った首筋の筋肉が引きつって見える。

「このろうそくの灯が消えるまでに口を割るのだぞ。決着がつかなければ今夜はここへ泊り込みだ」

まんざらおどしでもなさそうな木谷はゆったりと胡座を組んだ。製薬会社だけにろうそくはお手のものだ。木谷の手にしているろうそくは百匁ろうそくという大きなものだ。それがもう二センチ位になっていた。

「友達の面前で事がばれたのだぞ。私がいくら内密にしてやりたくても無理だ。退学だな」

退学、という言葉ではじめて伸子は大変なことになった、という具体的な現実が実感として迫ってきた。



父の顔が浮かんできた。呉服商は統制でお先真暗だ、と足袋や千人針用の晒布を細々と販売して嘆いてばかりいるいじけた父の顔であった。母は病身で父に頼りきって父よりもいじけた心細い顔をしていた。弟は中学生である。父は伸子を頼りにしていた。

伸子達はいつ死ぬか解らない毎日であったが、退学が明日からの現実になるのなら、今日生きている限り阻止せねばならない。

「学校側だけの、つまり貴様一人の行為でないと解ればもみ消す方法はある。貴様が白状しなくてもいずれ解るのだ。それを今、白状すれば私が退学を停学までにはしてやるぞ」

調べれば解ることだ、の言葉は、催眠術師の言葉のように伸子の決意を麻痺させていった。

〈そうだ――。今解るか、いずれ解るかで、停学の可能性がうまれるのだ〉

柴野の名を口にすまいという伸子の決心は脆くも崩れた。

「柴野という人と一緒にやりました」

伸子の頬に涙が流れた。

木谷は満足そうに肯くと、はじめから素直にしておれば痛い目に合わなかったのに、と伸子の顔の腫れをそっと撫で、急に優しい声で囁いた。

「いうことをきけば、柴野を助けてやるよ」

伸子はきょとんとした。

〈柴野の名をたった今、口にして、彼を窮地に陥し入れたばかりだというのに、助ける方法なんて――〉

「本当に、本当に、柴野さんを助けてくださるのですか。ききます、何でもききます。どんなことでしょうか」

この言葉を後年思い出してみると、哀れさを通りこして滑稽でさえあった。

教育者であり中尉である木谷がそのような行動に出るとは疑ってもみなかった。

焔が消えた。未来が消えた。

終戦の三日前の出来ごとであった。

来賓の祝辞が済んで、学校長の挨拶がはじまっていた。

「……ここ二、三年来、看護士の希望者がかくも多数になりつつあることは、精神病院協会にとってはこの上もなく喜ばしい現象である。看護補助者及び看護士募集の看板は私達の病院では取り外したことがなく、それでも応募者が来なかった時期に比べて、本日無事に戴帽式を迎えた諸氏の過半数が男性であることは、私達にとって

夢のようで、まことに慶賀すべき出来事である。他の専門は諸氏にとっては未経験で、これから実習病院でしっかりと身につけてきて欲しい。実習病院は常勤の看護婦や見習い以外に諸氏を預ることになるので、仕事過重になって予想に反して不愉快な扱いを受けることもあろうが、それも一つの対人関係の勉強だと思って学んで欲しい。特に精神病院勤務者に対する偏見は今だに残っているむきもあるやにきくが、諸氏は仕事に誇りを持ち、それを克服して卒業期を迎えてもらいたい」

実習病院での実習は厳しく、その辛さにさぼってパチンコや喫茶店でゲームをする者もあると伸子は聞いている。実習先の婦長の判が出席のしるしに必要であると、その判を買ってきて、にせアリバイを作ったりもする。実習では問題の発生が多く、隘路となっていた。

今、挨拶をしている学校長の夫人が、伸子の友人の和子だった。和子の生家も旧い医者で、医者仲間に縁があっても不思議ではなかった。そのことを知ったのは、伸子が十五年振りにクラス会に参加した時であった。それまでクラス会の通知はあったが、伸子は一度も出席しなかった。

停学処分を受けたことで伸子は肩身狭く暮した。

あの夜、木谷は中尉の権限で、走っているトラックを停め、伸子と同乗した。

トラックの振動で躯の奥の方からぬるぬると流れ出す木谷のザーメンを、伸子は木谷の乱暴によって流出している血液だと思った。死ぬ覚悟を平素叩きこまれている筈なのに、トラックから飛び降りもせず、出血多量で死ねばよい、とだけ思っている自分がうとましくてならなかった。

「誰にもいってはならない。黙っていれば解ることではない。それともずっとこれから先、私の女になるか」

振動にまぎらわせて木谷は伸子の尻に手をやり、愛玩物のような気易さで撫で廻した。

あの時の木谷のあの異常さは何だったのだろう、と伸子は木谷の横顔を呻きに近い憤りを以て眺めた。海綿のようにふやけた伸子の頭の中を、木谷に手を縛られた時の身震いするような恐怖が甦った。木谷は伸子のもんぺの紐をちぎるとそれで伸子の手を縛った。自由になるのは足だけだ。伸子は股間を開くまいとした。木谷は内股をつねったり叩いたりした。伸子は痛さに下半身をよじらせた。いつ木谷が手を滑らせたのか、伸子の受入れたくない部分に、木谷はまず指を入れると、その指を自分の口に持っていき舐めた。なぜそんなことをするのか、何が何だか解らなかったが、木谷が変質的だという予感がした。

トラックの人達は軍歌を歌いだした。その声にかき消される程低い声で、木谷は呟きだした。伸子の腰に廻した手の指先に力をこめながら呟いた。

「昔、十二、三の時だった。田舎道を歩いていた。向うから荷車がきた。行き違った時、荷車の上に牛がころがされていた。まだ成長していない子牛で、逃げないようにか手足を縛られてころがされていた。田畑用に使われるのか、乳牛なのか、私にはよく解らなかったが、街育ちの私は牛が珍しかったので、擦れちがったあとも振り返ってその荷車を見ていた。手拭いをかぶった百姓姿の男は私を意識したのか、それとも単調な田舎の一本道を歩く時の道楽なのか、荷車を停めると肩の布を外し、牛のそばに戻り、牛の毛並を撫でさすりながら、いきなり牛の秘部に指をつっこんだのだ。私はギクリとした。百姓男はその指をまるで味見をするように口に入れ、舌先で味わっている。私はその光景にどぎまぎした。躯中にしびれるような快感が伝わり、私は興奮した。男はニタッと私に笑いかけて、またすたすたと荷車を引き出した。それ以後、私はマスかく時、その光景を思い浮かべるんだ。女を一度、その牛のようにしてみたかった」

木谷の言葉に、伸子は全身が牛の涎をからませられたように粘ってきた。牛並みに扱われた侮辱で、できたらすぐにでも洗い潔めたかった。

（つづく）

□第五回

神戸文学賞
神戸女流文学賞作品募集

小社は昭和51年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

。第一回神戸文学賞「島之内ブルース」（田靡新＝尼崎市）同女流文学賞「ペットの背景」（小倉弘子＝大阪市）

。第二回神戸文学賞「姥捨て」（奥野忠昭＝大阪府柏原市）「生活」（吉峰正人＝神戸市）との回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞。

。第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」（蒼竜一＝奈良市）同女流文学賞「夢の消滅」（大原由記子＝高知市）

。第四回神戸文学賞「溶ける闇」（高木敏克＝神戸市）同女流文学賞「影と棲む」（田口佳子＝伊丹市）

ここに第五回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

〈募集要項〉

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で応募作品は一篇に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。

一、締切りは八月一五日（当日消印有効）

☆なお、選考は本誌が依嘱した選考委員によって行います。

一、入選発表は本誌昭和五十六年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。

一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一　大神ビル七階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。電話〇七八―三三一―二二四六

主催／月刊神戸っ子

■連載紀行

素足のアメリカ

蒼竜一〈作家〉

裸足で歩いた記憶がある。釘やガラス片を踏みつけては、しょっちゅう足を傷つけていた。その頃、ブルーチップスを集めて、景品にもらったウェブスターの辞書に、トモローとはFUTUREの意味だと書いてあった。私はうれしくなって、その辞書を何時も小脇に抱えて、歩いたものだ。

もちろん、明日が今日になり、今日が去日になるなんて、信じなかった。トモローは、いつだって未来だった。

〈3〉TOMORROW

「ユーはグラスを刈ってレイキをし、トラッシュキャンは、フロントのサイドウォークへ出しておけ、ミーはバッキャードのアイビーをトリムするから、オーケー？」

ボスが私に命令する。太陽はまだ出ていない、朝露深い、白人地帯の豪壮な邸宅の庭である。ちっとも儲けにならない庭師ボス稼業に行き詰まった私は、週のうち何日間かは、他のボスの助手（ルーパー）として働くことになった。背に腹は変えられぬとは言え、一国一城の主が、急に宮仕えする心境である。

帰米二世であるボスの言葉は、要するに草を刈って掃除し芥鑵を表の歩道に出しておくように、私は裏庭の蔓草の散髪をしておくからという意味である。こんな言葉で毎日を送っているものだから、私自身の日本語もいささか、可笑しく成りかけていた。それはともかく、午前中の仕事は、ボスと呼吸がぴったり合い、順調に捗って行った。午後になり、頭上に覆いかぶさるような、太陽に炙（あぶ）られ始めた頃、ボスの感じが奇怪になった。

その日廻る予定の庭数三つを残して、仕事がちっとも進まなくなった。ボスが、働かない。いや働いているのだが、芝生の真中に坐り込んで、関係のない事を始めるのだ。例えば、なにも今しなくてもよいシャベルの折れた柄を修理するとか、裏庭に実もたわわになっているグ

レイプフルーツを、三十個もたたき落として、芥鑵に捨てるとか、エトセトラである。私が抗議すると、ミーはボスだ、黙って働け！と言う。そして、次の仕事場に移動する時の、慌しさと言ったらない。まるで火の手がそこまで迫って居る、火事場から逃げ出すみたいに、血相を変え、トラックに道具を積み込むのもそこそこに、飛び出して行く。しかも、無暴というより神風トラックよろしく、〝タイム・イズ・マネー〟と叫んで、次から次へとびゅんびゅん車を追い越して行くのだ。頭を打ちつけないように、助手席の私は、両手で体を支えながら、ボスがのべつ幕なしに喋る話に合槌を打たねばならないあまつさえボスの話は、若い娘が居ると、「よい血色をしてるなあ、血を分けてくれないかなあ」とか、老人が

山中にある白人専用居住区。入口に私設ポリスをおき許可なしに外部の者を入れない。

居ると「彼奴らが死なないから、税金が高くつく。働けない奴は早く死ねばよいのに」とか、「ミーは、原爆に会っているから、白血球が少なくなって行く。いつ死ぬか分らん」とか言い出すものだから、私は生きた心持ちがしない。

仕事場に着くと、ローンモアを車から降ろして草を刈れという。ところが生憎、その家の庭には刈るべき草がないのだ。私はボスにあわせるのもヘルパーの務めと、エンジンを始動し、草の生えていない庭をガタゴト機械を一周させて、エンジンを止めた。

「ボス草刈り終りました」、「よし」、「レイキをし水洗いをします」、「よし」といった具合で、これもボスに呼吸を合わせることで、何とか仕事をやり果せることが出来た。

日が落ちて帰って来ると、つくづく神経が疲れていた。土方仕事のよさは、いらぬ神経を使わなくて済む処にあるのに、これじゃオフィス勤めより数倍も気を使う。可笑しなことだと、夜ビールでも呑まなやり切れなくて、近所のメキシコ人の店に行った。

行く途中、前を恐ろしく均斉のとれた女性が歩いている。白いパンタロンの引き締ったお尻に長い脚、ブロンドの髪を微かな夜風に靡かせて、颯爽と歩いている。私は、さぞかし美人であろうと心ときめき、袖から出た白い手袋にも優雅な趣を受けとめた。刹那、振り向いた彼女の顔を見て、思わず声をあげそうになった。

街灯の明りが、パームツリーの木に遮られたちょうどその細い翳りの中で、顔のない顔が笑っていたのだ。豊かなブロンドの髪だけが、闇の中に浮かんだようで、それに縁どられて歯だけが白く、もし彼女が口を閉じていたら、私は恐らく透明人間と勘違いしていたかも知れない。

「ハーイ、あなたあのトラックを持っている庭師でしょう」

彼女は私の住居の近くに住む黒人娘だ。よからぬ仕事

をしていると言って、隣りのばあさんが眉を顰めて私に告げた事がある。どうやら、今から夜のお勤めに出かけるらしい。

「あなたのトラックで、私の荷物運んでくれない。今度、引っ越しすることにしたのよ、わたし」

ムーブしようとしまいとオレの知ったことか、勝手にしてくれと、むしゃくしゃする本心は言いたかったが、そこはそれレディファーストの国で、

「折角知り合いになれたのに、残念です」と、知り合ってから一分も経っていないのに、残念がっておいた。

「本当に、わたしもとても残念だわ。引っ越しはサタディーなの、来てくれる？ピックアップでないと積めないのよね」

只で仕事をすると私は後が厄介だとばかりに、時間につき幾ら支払うかと訊くと、暫く考えてから五ドル出すという。どうやら、彼女モーテルで身体で稼ぐ時間給から算出したものらしい。

けったいなボスのヘルパーとして酷使されて、時間給二ドルもらうよりは、余程増しだと思って、O・Kした。

その週末、車を持って行くと、彼女の黒人のボーイフレンドが手伝いに来ていて、彼と二人で荷物を積んで、運んでやった。すると、おかしな事に、立て続けに引越しの仕事が舞い込んで来たのだ。私はその度毎に、黒人地帯のど真中をボロのトラックを駆って走り回った。

烈しい暴動の波に晒された黒人ゲットーとしてその名を知られた、ワッツにも平気で入って行った。私のトラックは、その身窄しさにおいて、何処へ行っても引けをとらなかった。

片側のドアは閉まらないので、ロープで結えていた位だから、日本のように車検のある国なら、とっくの昔に私のトラックは廃車になってしまっていたろう。この車に乗っている限り、ゲットーでは安心だと私は信じていた。

ところで、こんな事をしながらも、私はただ事態の成り行きに身を任せ、手を拱いて毎日を送っていたのではない。アメリカのコンクリトジャングルの中から、その日その日の食糧を自分で見つけてくる、この単純なシステムを、私は面白いと思っていたのだ。原始の時代に還ったような気持になって、自分の食い物も見つけて来られないような男なら仕方がないと思っていた。原始の男は、ジャングルの中から食い物を見つけ、外敵と闘い、女や子供を養ったのだと、変な理屈をつけて攻勢に打って出た。

私はサンファナンド・バレイという、砂漠の方に開けた猛烈に暑い地域に仕事に行くことにしたのだ。そこなら、経験豊かな勝れた庭師は余り入っていないのではないか。彼らの仕事場は条件の良い処に落ち着いてしまっている。ローンモアショップで日系人のじいさんの庭師が、あんな暑い処、いくら金になっても行けん、体がもたんよと話しているのを耳にした。それに住民も金持ちでないと居住出来ない条件がある。家屋内完全冷房、プールの設備、中心街まで少なくとも五十マイルは離れている。ちょっと考えても、経費の高くつく生活条件が揃っている。

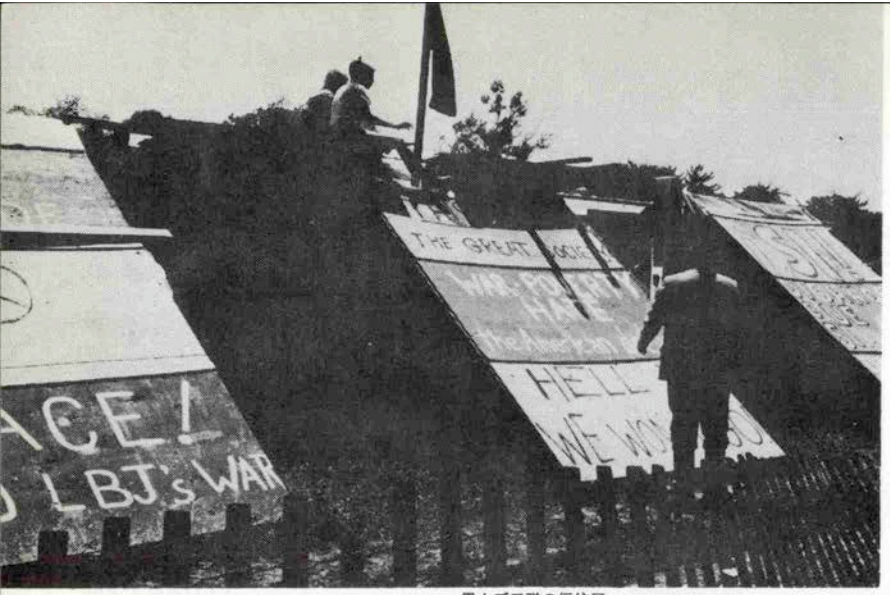
私は、その土地の大手の新聞に広告を二週間続けて出し、受付けはテレホンサービス会社に頼んだ。そして、毎日何らかの近隣住民に苛められながら、ジャンク仕事を続けて待った。

一週間程して見に行くと、数名並んだ受付嬢のうち私の電話番号の係りの女性が、こんなにメッセージが来ていますよと言って差し出したメモ用紙は、五・六十枚はある。家に帰って地図を広げ、依頼者の住所に印を付けて、電話でアポイントをとり、片端から回ることにした。芝生を植えてくれだの、植木を植えて欲しいとか、水道管を庭に敷設してスプリンクラーを取り付けてくれだの色んな仕事の種類がある。大きく分けると、それはティクケア（毎週定期的に草を刈り庭の世話をする仕事）とランドスケイプ（造園）、クリーンナップ（荒れ果てた

庭を元通りに整備する）の三種類に分かれる。

私は地域ごとに回る曜日を決め、月曜から金曜までを一人でティクケアに充てた。そして土、日にはヘルパーを二・三人雇って、ランドスケイプやクリーンナップの仕事をした。朝から晩まで日曜日も休まず働いたお蔭で、その月の末には二千ドル近い金が手元に入った。

これは、私にとって大変な驚きだった。当時七十年の日本の大学卒の初任給が二万から三万円ではなかったかと思う。日本の一ケ月分の給料を、私は一日で稼ぐようになったのだ。私はメキシコ旅行に車で行くためトラックの外に乗用車も持った。その車で、仕事を終えた後シャワーを被ってハリウッドにショーを見に出かけたり食事に行ったりした。



黒人デモ隊の仮住居

それは私の人生で、私が最も金持ちであったわずかな期間だ。私のジャンパーのポケットには絶えず金が入っていた。私は、色んな事がしたかった。その為に金が要った。金が欲しくて、金を貯めようとは思わなかった。私は、ブラジルとイギリスに金を送り、世界一周の目途がつくと、ボスを始めてちょうど一年半位で、仕事を止めてしまった。そのまま稼ぎまくってそれを元手に金持ちになれるチャンスもあったかも知れないが、私は恐らく金儲けには適していない人間であったろう。一応の事が分ってしまうと、急に興味を失い、虚しさを感じるタイプの男だ。未知の物に対して自分の未熟さからうまく行かない時には、猛烈にチャレンジし、ひたむきに働くが、一応こんな物だと分ってしまうと、もう阿呆らしくてその仕事をする気がしなくなる。何か流離の性が宿っているのかも知れぬ。

そんな私を現実に繋ぎ留めている物は、一種の律儀さのようなものだ。それによって、いつも私は義理固く耐えていることができるのだ。だから白人の顧客（カストマ）達は、日時にルーズな庭師が多い中で、私を絶対的に信用してくれた。これは恐らく、私の人生においてパラドクシカルな現実であり続けるだろう。

話を戻せば、私は庭師を廃（や）めるまで、ずっと黒人地帯の邸宅に住んでいたのではない。私がその家を引き払い越して行かねばならない状況は、私の仕事が軌道に乗って間もなく、訪れた。机上の仕事しか知らなかった私が水道管を引っぱってスプリンクラー工事をしたり、荒地に種を蒔き馬糞で覆って二週間後には美しい一面のローンに変えたり、庭に石を置きまやかしの日本庭園を造りあげたりしている。やれば何でも出来る、自分という奴もそう捨てたものでもないわいという思い上がりが、それなりに男としての自信を芽生えさせていたのであろうか。あるいはまた、嫌らしいことだが、小銭が入って多少気を強くしていたのかもしれない。

私は相変らず石やアバカドの実を投げつけられていたが、ある夕刻、その一つが私の背に命中した。私が、何をッ！と振り向いた時、まともに顎に石を喰らっていたのだ。私は犬ではない。人間だ。人間として石を投げられる。これ以上の屈辱はない。まだしも素手で殴ぐられる方がましだ。俺の人間としての誇りは、何処へ行った！俺はチキン（臆病者）か！

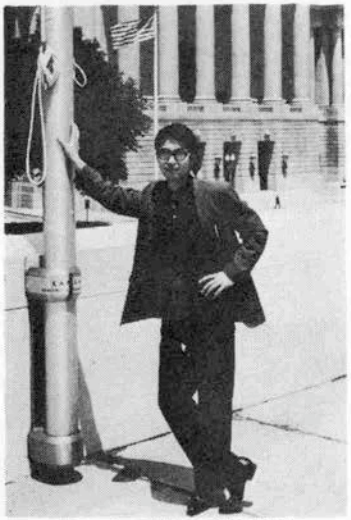
私は、生まれて初めて、逆上した。

怒りが噴きあげ、私は自分の身の安全を省みる事も忘れて、傍にあった棒杭を握りしめると歩き始めていた。自分の顔から血の気が退いていたのであろう。妙に白々と平面になってしまった、そのくせ奇妙に度胸の坐ってしまった自分を他人の如く感じながら、荒れ果てた黒人の裏庭に入って行った。庭の真中に立って、私は「出て来いッ！卑怯者」と叫んでいた。

樹の幹から一人現れ、屋根から飛び降り、たちまち五人程のハイティーンが顔を見せた。中には、中学生のような子供も混じっていた。「誰がやった。もうよい加減にしたらどうだ。お前か！」

最初に近付いて来た男が、ニヤニヤしながら、アイ・ドン・ノウと両手を広げて首をすくめた。彼等は私の前にずらりと並んだ。皆んな見くびったように笑っている。やばいぞと思ったが、もう後に退けなかった。一人がボクサーの構えをした。

私が棒を振りかぶった。彼らが私の周りに散った。一人が前に出て、私の振り下ろした棒に、腕を当て喚きながら横に走った。いつか彼等も真剣になっていた。一人が、折れた水道管を握っていた。また野球のバットを持って走って来る者もいた。ああ、何んて事をしてしまったんだと、後悔の念が、凄じい勢いで身体を駆け抜けた。



ワシントンの街角にて当時の筆者

途端に背中に一撃を喰らって、前に転びざま、私は後ろに棒を振り払っていた。手ごたえがあって、棒は私の手を離れ、彼方に飛んだ。一人が殴ぐって来た。私は、頭だけはやられまいと両手で庇った。

もう駄目だと思った。逃げようとあがいて、腰を蹴られて、また転倒した。まさに修羅場になろうとした時、私にバットを振り下ろそうとしていた男が、もんどり打って、すっ飛んで行った。また私の目に、丸い輪の帯のようなもので、横に体を弾かれて、枯草の中へ転がる男が見えた。

丸く輪にしたガンベルトを振り回して、怒鳴りつけている男がいた。緊張が解けて、フィルムの一コマ一コマが、急に正常に流れ始めたように、外界が感じられた。

みんな居なくなった庭に、拳銃を差したままの、丸い輪にしたガンベルトを片手にぶら下げた、一人の黒い男が立っていた。

「大丈夫か？」

多少寂しげな眼差しをした、警備員の制服を着たその男は、ちょうど夜警の仕事に出る処であったらしい。

なんとも言えぬ深い目の色をしていた。私は黒人の中に、このように底知れぬ閑かな目の色をした人間を、何人か見た。歳老いた掃除人夫の男に、大樹のように太った女の目の中に、そしてこの男のように平凡な中年の勤め人の中に。

その後間もなく、私は追われるようにして、その地区から出た。余計なトラブルを避けたかったというより、もう耐えられなくなっていたからだ。それでも、彼らを私が心から憎まなかったのは、幾つかの、あの目の色によってである事は確かだった。

（文中の写真は、いずれも筆者が当時に撮影したものです）